

温泉コラム

● 第 4 回 ●

「独特の泉質を持つ北海道の温泉」

札幌呼吸器科病院 薬剤部

河野文昭

(温泉ソムリエ・温泉保養士・温泉入浴指導員)

1. オソウシ温泉

トムラウシ温泉に至る道道718号からさらに側道にそれ、オソウシ川沿いに未舗装の道を進んだ先にオソウシ温泉はある。そこでは秋田犬の「ケン」が番犬として飼われており、もう老犬ではあるが、来客車のエンジン音を察知するとワンワンと吠え、主人に知らせるといふ仕組みになっている。エゾオオカミのいない今、体格のいい秋田犬はいわば山の王者に近い存在のようで、熊除け鹿除けに大いに役に立っているらしい。

オソウシ温泉の泉質は成分総計200mg/kgの「アルカリ性単純泉」で、源泉温度26.9℃、pH10.0の道内最高のアルカリ性を誇る。提供環境が秀逸で、未舗装路の先に滾々と湧き出る環境では一日の利用客数も限られ、塩素消毒などの必要がない。そのため、浴場内は加温浴槽を除けば、源泉をそのまま掛け流しした水風呂があるだけで、手付かずの温泉が楽しめる環境が揃っている。露天風呂には内湯の加温浴槽の余りを流したものと、源泉がそのまま直に流れ込む浴槽があるが、冬場は寒くてとても入ってられない。

このオソウシ温泉、特筆すべきは豊富に含まれた水酸化物イオン(OH⁻)で、成分分析表でも1.7mg/kgと、実測値として検出される濃度で液中に存在している(検出されること自体が珍しい)。このようなアルカリ性の強い液体では、入浴直後から皮膚上で脂肪酸のケン化が起こり、身体中に石

鹸のようなヌルヌルとしたぬめりが生じ始める。ボディソープや石鹸など要らないのではないかと思うほどだ。長湯をすると、皮膚表皮の余分な脂肪酸はあらかじめ洗い流されてしまい、やがて石鹸のような感触はなくなり、キシキシとした肌触りに変化してくる。

かけ湯槽をよく観察すると、半透明の白い膜のようなものが浮遊しているのが見て取れた。この浮遊する膜は、やはりヌルヌルとした触感があり、まるで一晩水に晒した石鹸のようだった。いや、恐らくあれは石鹸成分そのものだったのだろう。

このように、オソウシ温泉を筆頭とした強烈なアルカリ性の温泉は、まるで石鹸水にでも入っているかのような独特の浴感があるのが特徴だ。全てが掛け流しであるオソウシ温泉の場合、源泉をそのまま使った水風呂の浴感が実に興味深かった。

この源泉は26℃ほどあり、やや低めの温水プール程度の水温であるが、私が普段の温浴で入る水風呂(15℃)と比べて、やけに寒く感じてしまうのである。ここでいう「寒く感じる」とは、温浴後に浸かる冷水浴で感じる、「心地よい冷感」とは異なり、体温が奪われてゾクゾクするという感覚である。この感覚の差を文章で説明するのは難しいが、日常的に行っている冷水浴では感じない「寒さ」を、それよりも温かい、温水プールのような水風呂で感じたということである。約26℃と温度も高いので、15℃の水風呂と比べても皮膚の締めまりが弱いということも理由にあるだろうが、強アルカリ性の源泉によって皮脂が洗い流されたことで、熱の放散が進みやすくなった可能性が高い。

浴後には強い発汗が起こった。この汗は塩類泉などの入浴後に感じる水分の多い漿液性の汗とは異なり、比較的乾きやすいものであった。質としては脂汗の類なのかもしれないが、汗そのものがやけに肌に馴染むことから、この汗が、喪失した皮脂を補っているのだということも、肌で感じ取ることが出来た。いずれも個人的な推論でしかないのだが、皮脂の状態に応じて汗の成分が変化するのだとすれば、オソウシ温泉のように、皮脂を洗い流す効果を持つ強アルカリ性泉は、内服薬ほどではないにせよ、通常の白湯と比べて、血液中

の脂肪分を下げる効果が期待できるのかもしれない。食事療法と合わせれば、その作用はさらに顕著なものになるであろうし、発汗を通して皮脂の新陳代謝を実感できた点において、実に興味深い入浴体験だった。

強アルカリ性の温泉は本州でもしばしば散見される。しかし利用客数の兼ね合いで加温や塩素殺菌、循環方式を使用しているところも多く、pH 10を超える温泉でしかも、かけ流しが体験できる温泉は殆どない。ツルツルとした浴感の強い温泉の多くは、既に名湯としても高い知名度がある為に、浴客の数も多くなってしまふためだ。オソウシ温泉はそういった意味で、世界的に見ても稀有な泉質をそのまま体験できる環境が揃っている。場所も場所なので、車で行ける距離に在住の先生方には、ぜひ体験していただきたい温泉だ。

2. 湯ノ岱温泉(上ノ国町)

湯ノ岱温泉に至る道筋としては、北海道新幹線の本古内駅が判り易い分岐点となる。標識に従って道道5号線に入ると、景色は徐々に木々生い茂る山道へと変化する。かつての江差線沿いに走るこの道路は、やがてノスタルジックな廃線の景色を残す湯ノ岱集落へと至る。

湯ノ岱温泉はこのような山村にひっそりと残る秘湯で、上ノ国町国民温泉保養センターが唯一の日帰り温泉施設として営業している。古い施設だが、その古さ故に育まれた石灰華の造形が、浴客達の好奇心を刺激する。

泉質は「ナトリウム・カルシウム/塩化物・炭酸水素塩泉」であり、39℃の源泉を加温、或いはそのまま掛け流すことで使用している。浴槽は42℃の加温浴槽、39℃の源泉浴槽、そして35℃の加水ジャグジー浴槽の3つがあり、この他に源泉をそのまま使った打たせ湯がある。泉温が低い為か、露天風呂はない。

泉質面での特徴を挙げると、特に炭酸水素イオン(重曹成分)が1006mg/kgと高濃度に含まれているほか、炭酸ガスも607mg/kgと豊富に含まれている。源泉がぬるいために炭酸ガスの揮発は抑えられており、湯に浸かれば程なくして肌へ沢山の気泡付

着が認められる。通常、高濃度炭酸泉とは1000mg/kg以上の炭酸ガス成分を含む泉質のことを指すが、重曹成分も豊富な湯ノ岱温泉では、それに近い強力な血管拡張作用を体感することが出来る。成分総計としても4978mg/kgが計測されており、加温浴槽に浸かれば塩類泉としての温熱効果も十分に得られる。寒い冬場にも、熱の湯として充分対応できる泉質となっている。

炭酸成分とカルシウムが豊富なことから、浴場の床はまるで鍾乳洞のような、石灰華の描く波紋状の模様でおおわれている。特に打たせ湯付近の壁には、付着した飛沫(しぶき)が壁面全体で結晶化し、無数の乳房が垂れ下がったような造形を描き出している。それはまるで、壁そのものが生きていような不気味さを漂わせており、おどろおどろしい。結晶物の一部は絶えず注ぐ飛沫で溶かされ、乳房の付け根部分が蜂の巣のように穴だらけになっているのも、夢に出てきそうで怖い。まさに自然の作り出した前衛芸術作品だ。

湯ノ岱温泉のすぐ近くを流れる天の川では、放置された旧源泉がそのまま滾々と湧き出し続けている。この旧源泉は保養センターから歩いて5分程度の場所にあり、シュワシュワと泡を放ちながら川に流れていく様は、温泉資源として勿体ないと感じると同時に、泡沫と消える星屑のような光景は、まさに天の川そのもの。不思議と見入ってしまうものがある。旧源泉の温度は不明だが、現在の39℃の源泉は炭酸泉として理想的な温度であり、リラックス効果としても格別の作用を持つ。散策も含めて、湯ノ岱温泉は休日の安息を得るにもうってつけの温泉なので、道南方面に旅行の際は是非入りに行ってみるとよいだろう。

3. 豊富温泉

驚くべきは道北の秘湯。留萌を越えて羽幌くらいまでならともかく、天塩の先にある豊富町は札幌から日帰りで行くにはあまりに遠い。しかしながら一泊で稚内に行く際、或いは帰る際には、必ず立ち寄ってしまう。

豊富温泉の源泉は35℃。そう熱い湯ではないが

成分総計13220mg/kgあり、等張泉と比べてやや重い高張泉、ガッツリ温まる「含ヨウ素・ナトリウム/塩化物泉」である。炭酸水素イオンも2302mg/kg含まれており、高い血管拡張作用があることも伺い知れる。

車から降りた瞬間に感じるのは強烈な石油臭で、この温泉がマニアの間でも好評な「アブラ系」温泉であることがわかる。道内ではここの他に、濁川温泉や長万部温泉といった「アブラ系」が存在するが、豊富温泉の浴感には抜群のインパクトを持っている。公共浴場としては町営のふれあいセンターがあり、露天風呂はなく内湯のみ。その代わり、一般浴場と湯治浴場が分けてあるなどの工夫がある(温度も違う設定にしてある)。

「アブラ系」として、豊富温泉に含まれる石油成分の量は非常に多い。見た目は薄茶色に濁ったよくある塩類泉だが、光の加減で湯の表面がテラテラと光沢を放っているように見える。これが湯の供給口付近になると、ラーメンの油のような玉となって、ふわふわと漂っているのである。アブラマシマシ…? いや違う、これは動物脂ではなく石油成分なのだ。好奇心に駆られて湯口の底に手を伸ばしてみると、ぬるりとした滓が底に溜まっているのが判る。源泉かけ流しで無濾過温泉の場合、湯口の底に鉱泥や湯の華が溜まっていることが多いので、これらを調べることで泉質の特性を知る手掛かりになる。豊富温泉の場合、指先にあたったのはネッチョリとした油の塊で、それを丁寧に指で揉み解してみると、その手触りが普段仕事で使うアレにそっくりであることに気付いた。

「あ、これワセリンだ……。」

思わず声が出たのも無理はない。豊富温泉がアトピー性皮膚炎に良く効く、という噂は前々から聞いていたが、その謎が一気に解けてしまった。ワセリンは医療現場において保湿薬の最も基本的な薬剤であり、軟膏基剤でもあるが、その原材料は元々石油だ。石油の混じる温泉にワセリンが溶けているというのは、よく考えれば不思議なことではない。しかし、ここまでハッキリと「ワセリン」の存在を感じとれるとは思ってもいなかったので、この体験には感動すら覚えた。

私は湯口の底に溜まったワセリン様物質を掬い上げると、体中にネッチョリと、念入りに塗りたくってやった。やがてそのワセリンも湯に溶けて浴槽中に散らばっていくわけだが、肌の隅々にまで刷り込まれたワセリン様物質は、そう簡単に洗い落ちるものではない。浴後はしっかりと保湿効果は持続され、肌の張りがいつもの温泉と全く違うのを感じた。なるほど、これは乾燥性の皮膚疾患の人に好感されるわけだ。

水風呂が無いので、上がり湯代わりに冷水シャワーを頭から浴びて、肌を絞めてから出たわけだが、強塩類泉につき温熱効果も高く、強い発汗はしばらく持続した。身体中の汗という汗から石油の匂いがするので、帰りの車の中が猛烈な石油の臭いで充たされたことは言うまでもない。異臭を発している自分の有様が、何だか妙に可笑しく感じられ、思わず吹き出してしまった。これほど強烈な石油臭があるのだから、中には匂いに中(あて)られる者も出て来ることだろうし、お湯そのものが肌に合わないという人も一定数いるだろう。しかし、これほどの強烈な個性を持つ鉱物油成分が、成分分析表に一切載らないというのも不思議な話である。泉質名に「石油性泉」という呼称はなく、豊富温泉はあくまで「含ヨウ素・ナトリウム/塩化物泉 弱アルカリ性高張性温泉」なのである。

このように豊富温泉は、成分分析表という型にはまらない神秘的な魅力を持った温泉だ。道北に立ち寄る際は、是非とも立ち寄ってもらいたい訳だが、強塩化物泉という性質を併せ持つことから、入浴の負担もそれなりに強い。長距離運転の後など、疲労時での入浴は体調不良も招きかねない為、一泊での利用をお勧めする。また、もしこの「アブラ系」に興味を持たれた方がいたら、新潟県の温泉巡りも強く推奨したい。新潟県内には石油含有系の温泉が集中して湧出しており、月岡温泉や新津温泉といった名湯も多い。フェリーを使った船旅も組めるため、よりディープな温泉旅を楽しめる筈だ。

4. 標茶温泉・味幸園

標茶温泉を提供する味幸園は、釧路から川湯温泉に向かう国道391号線沿いの、茅沼湿原を抜け

た先にある看板に従い、左折した先にひっそりと佇んでいる。宿泊施設のようにも見えるが、現在は日帰り温泉のみの経営ではないかと思われる。

手前の国道沿いには、潰れて廃墟となった温泉施設もいくつか散見され、市街地のホテル・テレーノ気仙の他に、若干離れたオーロラ牧場にも温泉が湧出していることを考えると、このエリアには広い範囲で地熱と温水脈があることがうかがい知れる。

味幸園の標茶温泉はpH9.2、成分総計770mg/kgの「アルカリ性単純泉」だが、道東らしく真っ黒なコーヒー色を呈する自噴のモール泉でもある。この温泉の素晴らしい所は、源泉が45℃と入浴に適した温度で湧出しており、加水も加温も必要ないという、絶好のポテンシャルで湯を楽しめるという点である。その鮮度は素晴らしく、腐植質を含んだ湯はとろみがあり、湯の表面には飛沫で生じた泡が見受けられ、これは湯口を中心に浴槽全体に漂っている。

45℃の源泉は、浴槽温度でちょうど43~44℃付近のちょうどいい塩梅(結構熱い)の湯温となっており、その蒸気が浴室全体を心地よい温度に温めている。カランからも温泉が出るため、石鹸の泡立ちが非常に悪い訳だが、オソウシ温泉の項でも

書いたとおり、アルカリ性の温泉はそれ自体に身体を洗浄する作用があり、浴槽に浸かれば尻がツルンと滑る程の皮脂ケン化作用を有する。湯の鮮度がいい為、お湯からはモール特有の爽やかな土の香りがして、草臥れた湯のような不快感がない。

同じアルカリ性単純泉ではあるが、高温である為か、標茶温泉はオソウシ温泉と比べてもよく温まる湯で、浴後の感覚もまるで違う。塩類泉に入った後のような火照りと、心地よい発汗が感じられ、汗の揮発による寒さも感じにくい。モール質の成分的な作用は未だ謎の部分が多いが、同じモール泉でも札幌の月寒温泉ではここまでの火照りは感じたことが無いので、やはり高温であるということが、浴後の冷え対策に高いアドバンテージとなっているらしい。オソウシ温泉と比べても対照的な浴感で、アルカリ性単純泉は本当に奥が深いと感じる。

源泉温度が45℃という点と、自噴掛け流しで浴槽との距離がほぼゼロ距離あるという点を考慮すると、標茶温泉は道内のモール泉の中でも最高級のクオリティを持った温泉だといえる。泉質自体も低濃度で、肌への刺激が少ないことから、酸性の強い川湯温泉の上がり湯として利用することをお勧めする。

お知らせ

日本薬剤師会 薬剤師賠償責任保険(個人情報漏えい保険)

年度途中の：加入者名変更・住所変更・解約など

- 各種変更手続きにつきましては、日本薬剤師会HP⇒薬剤師のみなさまへ⇒会員向け福利厚生のご案内⇒薬剤師賠償責任保険(個人情報漏えい保険)募集から各種変更届をダウンロードし、日本薬剤師会へ提出してください。 <http://www.nichiyaku.or.jp>
- 加入プラン変更については、増額の変更のみ受付しております。
- お問い合わせ内容：資料請求・会員確認・入金確認・商品内容・契約内容・加入方法

お問い合わせ先：日本薬剤師会 総務部 会計・厚生課 損害保険担当

TEL 03-3353-1190 FAX 03-3353-6270

(受付時間：平日の午前9時から午後5時まで)